

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)の刻限の「おさしづ」における「道」の用例を整理する。第4巻には刻限の「おさしづ」が16件ある。これは、年平均にするとわずかに4件である。第1巻では年平均24件、第2巻では同13件、第3巻では同9件であるから、刻限の数は年を経るごとに減っていることが分かる。このことに関連して、「おさしづ」では「用いる者が無いから、身上さしづにも刻限ちよいへ混ぜたる。遠い他の事情には混ぜてない。何ぼ刻限にて知らせど、刻限はいずれへやろと追い延ばすばかりや。そこで俄かの事情、身上のさしづでなけりや論されん。」(さ30・1・13 村田かじ身上願)と論されている。刻限の「おさしづ」は減っているが、個人の身上や事情にも「刻限ちよいへ混ぜたる」と言われている。

第4巻にある16件の刻限の「おさしづ」のうち、「道」が用いられるのは13件、3回以上「道」が用いられるのは8件である。

#### これまでの刻限における「道」

第1巻では、明治21年の教会本部設置認可後、「神の道」「神一条の道」と「世界の道」「世上の道」という言葉の対比による論が多くみられる。そして、「世界の道」に比べて「神の道」は一見したところ通りにくく、細道を行くようなものに見えるかもしれないが、それこそが先の楽しみとなる、親神の望まれる「道」であることが繰り返し説かれ、それは端的には、教祖の「ひながた」をたどる「道」であると論されている。第2巻においても、同じような対比が頻繁にみられ、「神の道」を通ることが強調されている。しかし、第3巻になると、それまでのような「道」の対比はあまり用いられず、第1、2巻の用例を前提として「神の道」の歩みについて、「この道」という言葉を多用して説かれるようになる。

今回取りあげる第4巻は、「神一条の道」と「人間の道(世界の道)」の対比も1件あり、また、第3巻と同様に「この道」が固有名詞的に用いられるものも散見される。以下では、いくつか用例をあげて確認したい。

#### 勝手の道を通るからどうもならん

第4巻の時期の大きな出来事として、明治29年3月9日(陰暦正月25日)の教祖十年祭、同年4月6日内務省訓令甲第十二号(通称、秘密訓令)発令、そして明治32年5月から始まる一派独立運動が挙げられる。なかでも、内務省訓令は天理教の取り締まり強化を内容としており、それを受けて教会本部では対応を連日協議し、おつとめ、鳴物、神名を一部改めるなど、その後の天理教の歩みに大きな影響をおよぼすことになる。

教祖十年祭から内務省訓令までの短期間に、6つの刻限の「おさしづ」が集まっている。そこでは、「悪水も出る、錆水も出る、泥水も出る。どんな道に付けるやら分からん。一時以て洗い切ったら、一時に救かる程に。」(さ29・3・31夜9時 刻限)、「この道は会議から成り立った道か。会議するから遅れる。……このまま送れば、びっくりするような事出ける。」(さ29・4・4夜1時 刻限御話)など、何か大きなことが起こってくることを

を示唆されている。そして4月6日、内務省訓令が発令されるのである。

これらの刻限のなかで問題になっているのは、「神のさしづ」を聞く者が無いということである。それについて、「残念でならん」「勝手の道を通るからどうもならん。」(さ29・3・24夜12時半 刻限)などの厳しい言葉で、「神のさしづ」を聞き分けて通るよう促されている。

#### 神一条の道/人間の道

「神のさしづ」をよく聞き分けてもらいたいということは、その後も、第4巻の刻限を通じて繰り返し説かれている。次の「おさしづ」もそのことを軸に、内務省訓令前後の「この道」のあり方をめぐって説かれていると思われる。

十分知らしたら、一つへ治めてくれにやならん。筆に記したとてどうもならん。皆勝手の理を拵える。何を思うても、この道神一条の道、どんな事も立て見せる。これからどんな事も神は大目に見て居る。神というもの、そんな小さい心でない。……ちよいとへと治め掛け、世界論し掛け。あらへの道、二三年前までは一寸も分からなんだ。あちら高い所へ声を掛け。容易でなかった。二分通り上ばりたら、倒れて行く。二分通り辛抱ようせず、知らんとも言えようまい。今日の日見て居る。神一条の道で神一条の言葉で出来たもの。早うから仕込んである。どんな事もこんな事も分からん事情又替わる。代の替わるようなもの。代替わり、根がどうも難しいてならん。程良う付いて二分通り行て喰い止まりて三分、一分の処難しい。一寸弘め掛け、三分立ちたら七分は直ぐに治める。もう一分難しい。何ぼ論した神のさしづ、皆んなあちらへ映るこちらへ映る。勝手の悪いさしづは埋もって、こんな事では一分の日難しいなる。……口上手弁が達者やと言うても何にもならん。日々取り扱い本部員本部員というは神が付けたものか。これ一つ改めてくれ。そういう理は人間心で付けた道、世界は人間の道。このやしき人間心で通る事出来ん。(さ31・9・30午前2時 刻限御話)

「この道」は「神一条の道」であると言われる。それは、親神が付けて治めている「道」ということである。それに対して、「人間心で付けた道」「人間の道」(第1巻から「世界の道」と表現されてきたもの)が対比され、それでは「このやしき」において「通る事出来ん」と論される。

このお言葉のなかに「二三年前までは一寸も分からなんだ」とある。「二三年前」まで教勢が大きく伸展し、「あらへの道」が付いてきたと思われたが、内務省訓令を境に、様子はがらっと変わった。この「おさしづ」からは、その一つの要因として「あらへの道」が付いたと思ったなかに「人間心で付けた道」「人間の道」が入り込んでいることを指摘されているように読むことができる。それは、端的には「神のさしづ」を真に聞こうとしないところに問題があると言われる。

そして、「口上手弁が達者やと言うても何にもならん」などと言われ、「人間心で付けた道」は改めて、「神のさしづ」を一つ一つ心に治めて身に行うこと、すなわち、「神一条の道」を通ることを、あらためて強調されている。